

# 室町時代の性向語彙について

—— 虎明本狂言を中心として ——

柳 田 征 司

一

語彙を生活誌の記述概念に従って類別する(注1)と、生活環境語彙・生業語彙・人間語彙などの分野語彙を認めることができる。

標題に言う性向語彙とは、性向およびその性向の人を表わす語詞の総体であって、身体語彙、感情語彙と分野を接する、人間語彙の中の、一小分野語彙である。

藤原与一先生は、方言語彙について、性向語彙發展の方向性ということを述べておられる。(注2) 性向語彙が、ほめたたえる方向によりは、非難したりけなしたりするす方向に、上向きによりは下向きに發展するということである。

以下、この御論考に導かれて、虎明本狂言の性向語彙のすがたを描き、すすんで、室町時代の性向語彙の体系とその特色とを究明するための見通しをたててみたい。

二・一

虎明本狂言(注3)の性向語彙は、一四七の語詞(句を含む)かなり、表1のように類別することができる。ここには、分類項目

と語形とを示すにとどめ、品詞・語義・用例等は割愛する。

△表1 V 虎明本狂言の性向語彙(注4)

I 利発な者

○賢い者 りこなな・りこんだいいち・りこんすぎる・りはつな・

さいかくな・けんじん・けんわう・こうしゃ・じよさいのない・

さかしい・すすどい・こころきき・くりのふかい・めのさやはづ

いた

○思慮分別のある者 ふんべつもの・たしなみのふかい・ねんをい

った

○しつかりした者 しかりもの・つつとした・かいがいしい

○能弁の者 くちがよい

○気軽な者 さくい・きさくな

I 愚鈍な者

○愚かな者 ぐちな・ぐどんな・ぐどんだいいち・どんな・あはう

な・ちゑのあさい・をこのかぎりな・うつけ・うつけた・たはけ

ぬかった・なまぬるい・ものおぼえない・まいあひののびた

○あわて者・思慮分別のない者 ふかくな・そこつな・そつじな・

ぶねんな・うるたへた

○ 役にたため者・不調法者 やくたいなし・ふがいない・すねはぎ

のびた・ぶてうはふな・くじぶてうはふな・ぶたしなみな・とどかぬ

○ 口べたな者 くちべたな

○ のろい者 てねばな

○ なまけ者 ぶほうこう・ぶしゅうな・ぶしゅうもの・のさもの

Ⅰ 勇敢な者

Ⅱ 臆病な者

Ⅲ 陽気な者 おくびやうな・おくびやうもの

Ⅳ 風流な者

ざれことぶかい・こじやれた・きょうがった・いさうじん・ひやうげた・こびた

うきょうな・やさしい・やさしさ・ひやうしずき・しうくずき・

うたずき・すまふずき・はなしずき

Ⅴ 善人・温厚な者

○ 善人・正直者 しゃうちきな・りちぎな・またい・またうど・こころのよい・どほねのよい

○ 温厚な者 じひな・じひある・やはらかな・えびすぎな・きのひろい・やさしい・なみだもろい

○ 礼儀正しい者 しつけじん

Ⅵ 悪人・粗暴な者

○ 悪人 ひきょうな・ひきょうもの・わるい・こころもすぐくない

○ 悪人・粗暴な者

○ 悪人 ひきょうな・ひきょうもの・わるい・こころもすぐくない

○ 悪人 ひきょうな・ひきょうもの・わるい・こころもすぐくない

○ 根性の悪い者・悪賢い者 いちのわるい・こすい

○ うそつき うそつき・いつはりもの・すっぱ・たらし

○ 粗暴な者・短気な者・情のない者 りふじんな・らうぜきな・らうぜきもの・ぶたうな・あくぎやくぶたう・どうよくな・けんど

んな・すいきやうじん・あらけない・あらくもしい・いたづらもの・だいたづらもの・はしたない・ひとでなし・きのみじか

い・きのはやい・きつい・あたりのきつい・ひとつかひがわるい・つよい・なさげない

○ 口やかましい者 わわしい・くちごはな・くちのこはい・くちのこはさ

○ 強情な者 じゃうごはい・じゃうごはな・じゃうの(が)こはい・じゃうごはもの・じゃうごはばうず・かたいちな

○ 礼儀を知らぬ者 しつけもない・しつけのない・こしのたかい

○ 傲慢な者・でしゃばり わうちやくな・ふてきな・だいたんな・こしやくな・づなし・おほふ・しゅつな・さしでもの

Ⅶ その他ほめたもの

Ⅷ その他けなしたもの

しはい・かうげばった・じだらくな・やうがましい・しふしんの

ふかい・はやりすぎた・こころのせはしい

Ⅰ からⅦまでの各分野の語数を示すと、表2の通りである。

△表2 √虎明本狂言の性向語彙一分野別語数

分野名	語数	分野名	語数
I 利発な者	23	I' 愚鈍な者	32
II 勇敢な者	1	I' 臆病な者	2
III 陽気な者	6		
IV 風流な者	8		
V 善人・温厚な者	14	V' 悪人・粗暴な者	54
VI その他ほめたもの	1	V' その他けなしたものの	7

二・二

狂言に登場する人物のすべての性向が、語詞として表現されてはいない。従って、登場人物の性格群と、性向語彙から得られる性格群とが完全に一致するということはない。しかし、虎明本狂言の性向語彙が狂言らしきを見せていることも、右に上げた二つの表から明らかである。

古川久氏は、「狂言の諷刺」(注5)の中で、次のように述べておられる。

諷刺された内容は、社会的なものとしては、権力・宗教・道徳・習慣・歌道等の各方面に亘り、個人的なものとしては、主従・師弟・親子・夫婦・老若等の諸關係の上に、無智・無力・傲慢・臆病・貪慾・狡猾・不正・虚偽等が扱はれてゐる。

この説明も、先の二つの表とよく合致している。性向を表わす語詞を曲の中で見てみる。「八幡の前」では、教えられた歌を覚えることのできない「鈍な」者が笑いを演じる。「右

近左近」では、「くちべた」で「くじぶてうはふな」右近が地頭に訴え出る稽古をして、しどろもどろになる。「空腕」では、夜遣いに出された「臆病な」太郎冠者が笑いをひき起す。「伯母が酒」では、「しはい」伯母と、その酒をなんとかして飲もうとする場とが笑いを演じる。このように、性向を表わす語詞の中には、一曲の中で重要な役割をはたす性向を表わしているものも少くない。

二・三

虎明本狂言の性向語彙が、狂言らしきを見せていることを認めた上で、虎明本狂言の性向語彙に見られる特色を考えてみよう。

一つに、I利発な者・I'愚鈍な者の分野に属する語詞の数が多きが挙げられる。

次に、ほめたたえるもの、非難したりけなしたりするものという観点からみると、けなすものの語数ははるかに多いことが挙げられる。

心理学には、性格について二つの対立する考えかたがあるということである。(注6)。一つは、性格がその人に実在するとする考えかたで、他は、性格が第三者の目に映ずる姿のうちに仮想されたものであるとする考えかたである。しかし、いったんことばに表現された性格は、後にも見るように、誰かの目を通して表現されたものであって、性向を表わす語詞は、価値感をともなった評語であると言わなくてはならない。心理学者の中には、ことばに表現された性格のもつ、こういった価値的な面を排除して研究をすすめようとする人もあるようである。しかし、すくなくとも、ことばを見つめようとする者は、性向を表わす語詞が必然的にならざる価値感を重視しな

くてはならない。つまり、ほめたたえるもの、非難したりけなしたりするものという観点を重んじなくてはならない。

さて、けなししているものとは言っても、虎明本狂言の性向語彙のそれには、悪意のないものもある。例えば、「のさもの」はなまけ者の意で、主が、下人のことを言う場合に用いているが、林屋辰三郎氏が述べておられるように、この語には、「一種の愛情がこめられている」(注7)。逆に、ほめたたえるものも、完全善意ではないものもある。「正直な」主は、下人からすれば、だましやすいためであり、「真人」の婿は人になぶられる。「正直な」「真人」もすつきりと完全善意ではめたものではない。

これらのことを含んだ上で、ほめるものとけなすものとを比べてみる。表2のうち、ダッシュのついた分野の語詞はけなすもの、Ⅱの一部およびⅠⅡⅤⅥのダッシュのついていない分野の語詞はほめたものと言えよう。従って、虎明本狂言の性向語彙について、ほめたたえるものよりも、非難したりけなしたりするものの語数がはるかに多いことが言える。

以上、虎明本狂言の性向語彙を類別し、そこに二つの特色を認めた。

## 二・四

次に、性向を表わす語詞の用いられさまを見る。用いられさまを見れば、性向を表わす語詞がどのような場合に必要とされたかが明らかになる。性向を表わす語詞の用いられさまは、次のように分けてみるのがよい。

会話の部分に用いられている場合

### 1 他覚表現

a 直接その相手にむかって述べる場合

b 第三者にむかって述べる場合

c ひとりごと(観客を意識する場合あり)で述べる場合

d 観客に説明する場合

### 2 自覚表現

a 相手にむかって述べる場合

b ひとりごと(観客を意識する場合あり)で述べる場合

c 観客に説明する場合

### 3 その他

a 人の評判を気にかけて言う場合

b 世間の評判を言う場合

c 相手の語をうけてくりかえす場合

d 相手の態度に怒って言う場合

e 一般的に言う場合

歌謡の部分に用いられている場合

説明の部分に用いられている場合

以下、最も例が多い会話の部分の用いられかたを見る。

他覚表現とは、自分以外の人の性向を述べること、自覚表現とは自分自身の性向を述べることを表わす。他覚表現・自覚表現という観点からみると、他覚表現の例が約二二〇例、自覚表現の例が約三〇例で、他覚表現の例がはるかに多い。他覚表現の例の方がはるかに多いことは、性向語彙に、ほめたたえる語詞よりも、非難したりけなしたりする語詞の方が多いことと、よく符合している。

他覚表現の中では、aの直接その相手にむかって述べる例が最も

多い。けなした例を、「清水」から引く。鬼の面をつけた太郎冠者が主にむかって日頃のうつぶんをはらしているところである。

それならはたすく事もあらふが、いふ事きかふな中くきまらせう、それならはいはふ、そうじて汝はけんどんで、人づかひがはるひ、しんでもちごくにおてふ(中略)きけは夜かやをもつらせひでねきするげなが、そのやうなとうよくな事するものか、いそひでつらせひ

直接その相手にむかつてけなして言うものうちのあるものは、「たらしめ」「人でなしめ」と「め」をともなつて、形式的にものしり語になっている。

直接その相手にむかつてほめて言う例もある。「河原太郎」から例を引く。はじめの話しは太郎で、後の話しは酒を飲みに来た客である。

身共が酒はさんくつくりそこなふて、あまふすうて、のまるゝ事では御さなひ程に、女共になもつて出せと申たれ共、きかずにもつて出てござる、かまいてまいつてくださるゝな、わごりよはりちぎな人じや

性向をほめて表わす語詞を、皮肉で用いた例が「鈍根草」にある。みょうがを全部食べてしまった太郎冠者を、主が、みょうがを食べると鈍になると言つて、さんざんに叱る。ところが、その主が忘れものをする。そこで、太郎冠者はこぞとばかり、主をなぶる。

いやさてみやうがはまいらず、たではかりまいる程に、おりんこんに御ざあつて、物わすれはなされまひ

接頭辞「お」が皮肉の気持を表わすのに効果的にはたらいている。

他覚表現のうち、aについて用例が多いのは、bの第三者にむかつて述べる例である。下人同士で、主をほめたりけなしたりする。「文荷」では、二人の下人が道に行き道々、主人を評して、次のように言う。

なふたのふだ人は、どこぞが又きつひ人じや程に、あまりゆたんすまひぞ、あふやはらかな所も有、きつい事も有人じや

弱い者が強い者の性向をけなすときの心理、またけなした後の心理は、性向を表わす語詞の役割を考へるためにも、今後掘り下げて考へてみたい問題である。

ほめた例を上げる。「鳴子」では、田の番をしている下人のところへ、主人が酒を持って行つてやる。主人が帰つた後、下人たちは、主人をほめる。

二郎くわじや、なにと思ふぞ、たのふだ人のやうに、心のつひた人はあるまひ、其事、世間からもさういふてはむる

bの例は、下人同士の主人評に限らない。

bの例の中には、身内の者をけなして言う例もある。主人が客にむかつて、身内の下人をけなす。

しつけないやつをつかひまらすれば、はぢをかきまらする(口真似)

次に自覚表現をみると、その例は少い。しかも、その半数の例は、次のような、観客に説明するためのものである。

浴中に住居いたす心もすぐになひ者で御さる(末広がりに)

これは、観客に説明するために、自分自身の性向をけなして述べているものと考えられる。

他覚・自覚という観点からは処理できない例が若干残っている。

それは3その他にあげたものである。

虎明本狂言の性向を表わす語詞は、以上のように用いられている。この用いられざるについて注意されることをまとめると、次の三項になる。①性向を表わす語詞は、その大部分がある人物に対する評語として用いられている。②他覚表現の例が自覚表現の例よりもはるかに多い。③そのことは、非難したりけなしたりする語詞がほめたたえるものよりも多いこととよく符合する。

三・一

虎明本狂言の性向語彙のすがたを一応描いた今は、作業を他の室町時代語資料にすすめていく姿勢をとらなくてはならない。

室町時代の京都人が性向を表わす語詞をどのように用いていたか、それは明らかにしたい問題である。特殊ではあるが、狂言の用いられざるから想像してみるのに、少くとも他覚表現が自覚表現よりもよく行なわれたということは狂言の場合と同じであったのではなからうか。心理学者クラーゲスは、性格の認識について、他覚が自覚に先行することを述べている。(注8)認識にとどまらず、その表現においても、他覚表現が自覚表現に先行するもののように思われる。他人の性向の中では、自己の意志にそわないものが強く認識されるのが自然であろう。ひいては、性向をけなし表現する頻度が高くなるのが自然であると思う。

三・二

性向語彙のひろがりに目をやる。同じ大藏流狂言本の、虎清本・虎寛本、および、天草版平家物語・同伊曾保物語・同金句集・史記

抄・閑吟集・隆達小歌集・宗安小歌集・御伽草子・日葡辞書の、各資料(注9)に見られる性向を表わす語詞(異なり語(句)数、一七五語(句))をとり出し、狂言とあわせて語彙表をととのえた。語彙表は、表3として、その一部(「愚鈍な者のうちの〇愚かな者の一部」を示すように、〇印で、その語詞が見えることを示し、資料ごとに見られるようにしてある。

表3 V 室町時代語資料十二種の性向語彙(注10)

分		野			
		書	言	言	語
語	詞	資			
		日	葡	辞	書
虎	明	本	狂	言	
虎	清	本	狂	言	
虎	寛	本	狂	言	
天	草	版	伊	曾	
天	草	版	平	家	
天	草	版	金	句	
史	記			抄	
歌	謠				
御	伽	草	子		

うつけ	をこのかぎりな	をこ・な	おろかもの	おろか・な
○	○	○		○
○	○			
		○		○
			○	

大きな分野ごとの語数を示すと、表4の通りである。

うづけた	○																		
うつけもの																			
たはけ				○															
たはけた					○														
たはげもの													○						
たくらだ																			
ばか・な																			
ばかげな																			
ばかももの																			
しれもの																			
かるい																			
ほれた																			
ほれもの																			
ぬかった																			
ぬかりもの																			
なまぬるい			○																
なまぬかった																			

M'		M	V'	V	IV'	IV	III'	III	II'	II	I'	I	分野 資料
その他けなし たものし	その他ほめた	悪人・粗暴な者	善人・温厚な者	無風流な者	風流な者	陰気な者	陽気な者	臆病な者	勇敢な者	愚鈍な者	利発な者		
48	16	270	167	1	16	6	21	10	31	165	157	日葡辞書	
7	1	54	14	0	8	0	6	2	1	32	23	虎明本狂言	
0	0	6	3	0	0	0	0	0	0	5	4	虎滑本狂言	
7	2	34	9	0	6	0	3	3	2	18	4	虎寛本狂言	
1	0	22	6	0	0	0	1	2	5	7	6	天草版伊曾保物語	
0	0	11	7	0	2	0	0	1	9	6	3	天草版平家物語	
2	0	7	11	0	0	0	0	0	3	3	5	天草版金句集	
21	12	53	53	0	1	2	1	2	12	21	50	史記抄	
2	0	1	1	0	1	0	0	0	0	4	0	歌論	
2	9	21	15	0	4	0	0	0	3	5	4	御伽草子	
75	29	346	220	1	25	7	23	12	45	204	209	総合性向語彙	

△表4 V 室町時代語資料十二種の性向語彙—分野別語数(注11)

計	ほめたもの	378	911
	けなしたものの 判定しがたいもの	500	1196
	33	500	378
	12	95	41
	0	11	7
	8	62	18
	1	32	17
	2	18	19
	0	13	18
	2	98	128
	0	7	2
	1	28	34
	42	645	509

資料ごとに、その性格を反映した性向語彙のすがたを見せている。とりあげた全資料から得られる性向語彙を、「総合性向語彙」と呼ぶことにする。

虎明本狂言の性向語彙について認めた二つの特色はここではどうなっているであろうか。

利発な者・愚鈍な者に属する語詞は、狂言と同じく、一般に各資料ともに数多く見られる。従って、総合性向語彙についても、利発な者・愚鈍な者の分野に属する語詞の数は多く見られる。他の時代について同様の語彙表をつくってみたら、どうなっているのだろうか。

次に、ほめたたえるもの、非難したりけなしたりするものという観点から見る。日葡辞書・伊曾保には、狂言と同じく、けなすものの方が、かなりの差をもって多く見られる。史記抄には、逆に、ほめるものの方が、かなりの差をもって多く見られる。天草平家・同金句集・御伽草子では、ほめるもの、けなすもの、あまり差がない。

総合性向語彙についてみると、けなすものの方が多く見られる。しかし、ほめるもの五〇九語、けなすもの六四五語と、差はあまり

大きくはない。

総合性向語彙を分野ごとに見ると、利発な者、愚鈍な者という分野では、語数の差はほとんどない。勇敢な者、臆病な者という分野では、ほめる勇敢な者を表わす語詞の数が多く見られる。善人・温厚な者、悪人・粗暴な者、その他ほめたもの、その他けなしたものであるという四分野では、けなすものの方がはるかに多く見られる。

### 三・三

さて、けなす語詞が多く見られる総合性向語彙のうちの、一々の語詞はどのように造語されているであろうか。性向を表わす語詞を、形容語詞と、人そのものを表わす語詞とに分けて、語の構成をみると表5のようになっている。

△表5 V性向を表わす語詞の造語法

形容語詞(句) 九〇七語(句)

一 形容詞 一四三語 例 てばやい

二 形容動詞 三五一語

(一)「いな」(注12) 三五五語 例 けんな

(二)「い」な(の)「い」 一六語 例 じひな(の)

三 名詞 一三七語

(一)名詞+「の」 三五五語 例 かうまん

(二)名詞 一〇二語 例 とんよく

四 動詞 八語 例 くすみかへる

五 副詞 三語 例 ひろびろと

六 句 二六五句 例 ちるがあさい

人そのものを表わす語詞(句) 二六八語(句)



一 名詞

(一)「ししゃ(じゃ)・」

「じん」・「しにん」・「しも

の」など

1 「ししゃ(じゃ)」

2 「しにん」

3 「しにん」

4 「しじん?にん?」

5 「しもの」

6 その他

(二)名詞+動詞連用形

(三)名詞+形容詞終止形など

(四)動詞連用形など

(五)字音語単純名詞

(六)その他

1 動物名

2 その他

二句

二六三語

二一〇語

四二語 例 ちゑしや

三五語 例 たんりよじん

一四語 例 つるしようにん

一語 例 不調人

五六語 例 うつけもの

六二語 例 けんわう

二三語 例 くちきき

九語 例 ころよし

七語 例 たはけ

三語 例 りんき

一一語 例 あんがう

七語 例 たらたら

四語 例 例をこのもの

五句

形容語詞では、形容詞よりも形容動詞が多く見られる。形容詞の

約四割は、「はらくろい」のような複合語である。また、形容動詞

は、約八割が字音語である。

入そのものを表わす語詞では、「ししゃ(じゃ)」・「じん」・

「にん」・「もの」がよきはたらいしている。「ししゃ(じゃ)」がほ

める語詞をささえ、「じん」・「にん」「もの」がけなす語詞をさ

さしている。「もの」は和語でありながら、けなす字音語ともよく

複合している。動物にたとえて人をけなす語詞もみえる。愚かな

者を「あんかう(あんがう)」、意地の悪い者を「ふるだぬき」と

いった例が日葡辞書に見える。しかし、「オーピロシキ」のような

無生物にたとえた語詞は見えない。また、現代諸方言には、気むら

な人を「キムラノキヘー」、ガザガザする子どもを「ガザマツ」と

いように、人の名前に擬する、性向を表わす語詞が多く見られる

が、ここにとりあげた資料には、この種の語詞は見えない。

これだけのことを見ても、人びとが、性向を表わす語詞の造語法

を、特にけなす語詞の造語法をどのようにくふうしていったかとい

うことの一端をうかがい知ることができるよう思う。

四

虎明本狂言を中心として、室町時代語資料十二種に見られる性向

語彙について見てきた。すずんで室町時代の性向語彙ということに

なれば、多くの作業を終なくてはならない。

それらのことを成就したときには、私どもは性向語彙発展の歴史

的法則をも明らかにすることができるであらう。

(注1) 藤原与一先生「西部方言の語彙2 中国四国」(方言学講

座)第三卷 東京堂 昭36・4)、同「方言学」(三省堂 昭

37・6)を参照。

(注2) 同右、および、藤原与一先生「命名と造語」(日本民俗学

大系10「口承文芸」所収 平凡社 昭34・11)

(注3) 底本には、笹野堅氏編「古本能狂言集」一一三(岩波書店

一昭18・8 二昭19・11 三昭19・11)を用いた。

(注4) 語彙表に関する注記

1句(「きのみじかい」など)もとる。2一つの語詞の全用例が性向を表わすものとして用いられているとは限らない。3「やさしい」は二か所に入れてある。4語形は歴史的かなづかいで示す。5形容詞は終止形、形容動詞は連体形の、それぞれ口語形で示す。その形が用いられているかないかを問わな

(注5) 古川久氏「狂言の諷刺」(「能楽全書」第四卷 創元社版 昭28・8) P132

(注6) 古浦一郎先生「性格の記述——性格評語を中心に——」(コトバの科学3「コトバの心理」中山書店 昭33・6)

(注7) 林屋辰三郎氏「中世文化の基調」(東京大学出版会 昭28・9)

(注8) L・クラークス 千谷七郎氏「鹿野武元氏訳「性格学の基礎」(岩波書店 昭32・6)

(注9) 底本には、それぞれ次のものを用いた。「大藏虎清自筆狂言八番」「謡曲狂言」(国語国文学研究史大成8所収 三省堂)

(のち、「虎清狂言本」(古川久氏編「狂言本二種」わんや書店)を参照した)・笹野堅氏校訂「大藏虎寛本能狂言」(上・中・下 岩波書店)・亀井高孝氏翻字「天草本平家物語」(岩波書店)・「インポのハブラス」(天草版伊曾保物語)(新村

出氏格源一氏校註「吉利支丹文学集」下 日本古典全書 朝日新聞社)・吉田澄夫氏「天草版金句集の研究」(東洋文庫)・三ヶ尻浩氏校訂「史記抄」(ときに京大本の写真を参照)・

「閑吟集」「隆達小歌集」(「中世近世歌謡集」日本古典文学大系 岩波書店)・笹野堅氏編「室町時代小歌集」(宗安小歌集)(万葉閣)・「御伽草子」(日本古典文学大系 岩波書店)・「日葡辞書」(岩波書店)

(注10) 語彙表に関する注記

1先にあげた虎明本狂言の性向語彙の表に関する注記に準ずる。2形容動詞の例のうち、「りこん・な」「あほう・な」などと、活甲語尾の前に「・」のあるものは、日葡辞書に、「りこん」「りこな」の両形が見えるものか、他の資料に「あほう」「あほうな」の両形が見えるものである。3金句集においては、こころの部分に見られるものに限った。4史記抄においては、原文の引用、および原文の語をそのまま用いたものとはなかった。5日葡辞書においては、「X」(下)と注のあるもの、およびそれに準ずるものはとらなかった。6分類自体、今後勉強して改訂していきたい。

(注11) 異なり語(句) 数は、一一七五語(句)であるが、そのうち、「いたづらな」「いたづらもの」などの二一語(句)を二か所に類別したので、計が一一九六語(句)となる。

(注12) このうちのあるものは、語幹が名詞として用いられ、人そのものを表わすことがある。例えば、「正直・な」「すっぱ・な」など。

〔付記〕本稿は、昭和三十九年十一月に行なわれた全国大学国語国文学会・広島大学国語国文学会合同研究発表会での発表、「虎明本狂言の性向語彙」に手を加えたものである。(39・12・22) (広島大学大学院学生)